

4-11

「お話ししましょう！」～認知症高齢者と共感したい～

バリデーション～共感をめざして～

認知症ケア

個別ケア

特別養護老人ホーム ときわぎ国領

発表者：ユニットリーダー 清水栄子、向井夏美

共同研究者：介護職員 稲葉秀人、藤沼厚

所在地：東京都調布市国領町8-2-65

TEL：03-5438-1011

E-mail：tokuyo@tokiwagi.org

FAX：03-5438-1051

URL：http://care-net.biz/13/tokiwagi

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

定員99名。1フロア3ユニット（1ユニット9名）ショートステイ6名。
法人理念である「ゆとりと安心のその人らしい生活支援」を基本とし、小規模生活単位型（ユニット型）
において、利用者の個性やリズムに沿ったその人らしい生活ができるように支援している。

〈取り組んだ課題〉

バリデーションとは、認知症高齢者に有効とされているコミュニケーションの技法である。ゴールは、利用者与其他者との「共感」そのものであり、ホンネ（秘めた感情や問題となっている事柄）を引き出すためのテクニックである。職員があたかも自分のことのように共感しながら接することができれば、そこで新しい信頼関係が生まれるのではないかと考え、取り組んだ。

〈具体的な取り組み〉

（対象者）各フロアより1名選出。

長谷川式スケール、既往歴、周辺症状と行う前の対応方法などの情報の再収集。

（職員体制と頻度）

バリデーション外部研修を受講 2名

バリデーション内部研修を実施 2名

⇒計4名によって利用者1名に対し、介護者2名の担当で、週1度1回10～20分程度のペースで2～3ヶ月間実施。

⇒行う際には、1対1で話せる環境を創る。

（記録と評価）

バリデーション実施記録用紙を作成し、行う前の状態、実際のやり取り、結果・考察を実施ごとに記入。キーワードを抽出し、その都度バリデーションに適用していき、感情の変化や表出の手段を見出していく。

〈活動の成果と評価〉

- バリデーションの回数を重ねるにつれ・・・
 - ・少しずつ感情と心の中に抱える思いを表出し共感への過程をたどることができた。
 - ・訴えが具体化している印象があったが、主訴をつかみ、解消にいたることは出来なかった。それにより職員・利用者双方に共感を得ることが出来ず、終了にいたった。
 - 大切な存在とその裏の寂しさという背景をもっていることを知り、そこに焦点を合わせることで、未解決の過去の問題に近づくきっかけとなった。
 - 周辺症状の中の帰宅願望や不安感は軽減され、日中は穏やかな笑顔の多い時間が増えた。
- ↓
- 個別に利用者に向き合うことで、本人の口から新たな情報が引き出せ、発見につながった。

〈今後の課題〉

○勤務体系の問題等により、利用者1：担当1の体制が作れなかった。

○主観や共感は個人差があるため、次回からは体制づくりや実施方法を検討すると共にバリデーションに対する理解をもっと深めていく必要がある。

【メモ欄】